

サタンの超克  
—ブレイクの『ミルトン』について—  
(14)

Transcending Satan-Self in Blake's *Milton* (14)

川崎 則子  
Noriko Kawasaki

Abstract

This paper discusses one passage from William Blake's *Milton*, plate 17[19], lines 31-36. In this passage, Los and Enitharmon are both astonished by the visitation of the resurrected Milton to their mundane world. Since Los and Enitharmon are the pair created by Blake's imagination to represent the time phase of eternal Urthona, their first encounter with Milton carries a nuance of incompleteness or mistake. They mistake Milton for the ego-centered Satan whereas he actually has come to overcome Satan's failure. Though their mistake concerning their recognition is the same, their reactions to it are contrastive: Los is terrified; Enitharmon who is Satanic, is overjoyed. Their recognition is contaminated by Urizen's derogated ego-centered reasoning. They project their own failure of egocentric reasoning on Milton's personality. Satan seems to be Blake's favorite theme of his visual work at this period of composing *Milton*. "Fiber" and "polyp" also play an important role in both his visual and verbal expression and can be impressively exemplified in the plate 17[19].

ミルトンの現世への下降は、現世の生成に直接携わる神話人物ロスとその女性的「流出(Emanation)」エニサーモンとに深刻な動揺を齎す。

Los the Vehicular terror beheld him, & divine Enitharmon  
Call'd all her daughters, Saying. Surely to unloose my bond  
Is this Man come! Satan shall be unloosd upon Albion

[*Milton*, plate17[19], ll. 31~33]

ロス「運ぶ乗り物」としての役目を帯びるおどろの者であったがミルトンを見て恐怖に駆られ、亦聖なるエニサーモンは娘たちを皆呼び集め、こう言った。この大なる者はたしかに私の縛めを解くために来た者にちがいない。サタンはアルビオンの上に縛めを解かれるであろう。

ブレイク固有の象徴表現を押さえつつ読み解いてゆくと、この箇所の含意が浮かび上がる。「運ぶ乗り物」と訳出した“Vehicular”ないし“Vehicle(s)”は、ブレイクにおける使用は計9回で決して頻出語ではないが、強いインパクトを有している。初出は *Four Zoas* 第二夜 (page 29, l. 12, {II 154}, E319) であり、1808年前後に集中しているので、早くとも1795年頃に使われ始め、*Milton*, *Jerusalem* 製作時に熟した語であると推定される。

この語のブレイクにおける語義が最も明瞭に現れているのは最後の *Jerusalem* での使用例である。

But Los, who is the Vehicular Form of strong Urthona

[*Jerusalem* 53:1]

しかし、強きアーソナの「運ぶ乗り物としての形」を具えたロスは、

## サタンの超克

すなわち、存在の本体に直截に与る神話人物アーソナの強力な本質を、生身の現世の存在へと橋渡しする、輸送機関としてのロスの役割が明示されている。これは『ジェルーサレム』第三章冒頭の一行であり、次行は、

Wept vehemently over Albion ... [J5:2]

アルビオンを想って男泣きに泣き…

と続いていく。ロスは、言うまでもないが、存在の本質を毀たれている全人類、全宇宙の象徴であるアルビオンの回生を願い、アーソナの実働部隊として、アルビオン再生を企図する、永世と現世を行き来する媒介者ともいうべき存在である。蓋し「依代（憑代）」、あるいは“Form”と結べば「形代」である。

だが、今見ている第31行では、“The Vehicular Form”ではなく“The Vehicular terror”が用いられている。ロスは確かに、

Los rag'd and stamp'd the earth in his might & terrible wrath!

[J6:8]

ロスは激怒し地を踏み鳴らした、強力の限り恐るべき憤怒に駆られて！

O [lovely *del*] Lovely terrible Los, wonder of Eternity, ...

[FZ, page 90, l16 {VII447}E360]

おお、りりしくも恐るべきロスよ、永遠界の驚くべきものよ…

とあるように元来、“terror”の属性を帯びた者であり、ロスを見る者に恐怖を覚えさせる場合がある。

もう一つ、ここでの“terror”には、ロス自身が恐怖に駆られているというニュアンスがある。

『四つの活物』(Four Zoas) 第七夜に、

What are we [the Children of Man] terrors to one another. Come O brethren wherefore  
Was this wide Earth spread all abroad. not for wild beasts to roam

[FZ, page 28, ll 14-15 {II124-125} E319]

私たちはなにものか、互いこととの脅威なのか。集え、わが同胞よ、なにゆえ

この広い大地は四方に散大しているのか、野の獣が跋扈するためではあるまい

として、人々が互いとの疎外感、距離感を“terror”と感じていることが表現されているように、<sup>2)</sup> ロスは、目にしたミルトンに対して、距離感に由来する恐怖を感じている。続く第34行に「ロスは恐怖のうちにエニサーモンの言葉を聞いた」(Los heard in terror Enitharmons words) とある通りである。

一方、エニサーモンの方は、ミルトンの来訪を手放しで歓迎している。しかしそれが見当はずれのものであることは、彼女の言説に如実に現れている。曰く、「サタンを解き放つためにミルトンは到来したのだ」。実際には、ミルトンの目的はサタンの克服であると読者は了解しており、一種のステージアイロニーを醸している。

女性性エニサーモンにとって、サタンの自我、我執、知的分別は自らと不可分の属性であり、男性性ロスから抑圧されていると日々感じている自己の核である。彼女はミルトンがある種人間性解放のために再臨したことは感じているが、自己を中心としてしかもその見られない彼女には、開放の対象は自らの利己的自我であると信じて疑わない。しかも、その自我の解放が、普遍的人类すなわちアルビオンの解放に他ならないと誤解している。この点、拙論第5稿<sup>3)</sup>に述べたサタンの女性的「流出」ルーサの愚かしさと奇妙なパラレルをなしている。そもそも Diana Hume George が指摘しているように、「ブレイクは折に触れ、女性が、「この世の神」であるサタンとぐるぐるであることを、そして「家父長制的権威と残酷さ」を支持する者であることを読者に想起させる」のである。<sup>4)</sup>

### サタンの超克

さらに、第5稿でも論じたように、ある意味で一心同体の、男性性神話人物とその女性的流出（配偶者）の両者は、同じ認識の表裏を共有している。サタンとその流出ルーサがともに一人の人物の内面とも考えられるように、ロスとエニサーモンも同じ認識の上に立って、逆方向の反応をしている。即ち、エニサーモンのみならず、ロスもミルトンがサタンの解縛に訪れたと考えており、エニサーモンの歓喜に対して、ロスは恐怖しているのである。

ある意味では、ロスとエニサーモンの誤解は、De Luca の指摘するように、ミルトンの下降の旅路に、一般的な“mental journey”としてやや唐突なほど、瞬間的な面があるからだろう。

In literary symbolism, the vision of temporal continuity is typically expressed in the figure of the journey, but this figure exists in Blake's work mainly to be parodied and subverted. The hero of *Milton* perhaps comes the closest to enacting a traditional epic journey, but since it consists, strictly speaking, of a single instantaneous vertical descent, it is as unorthodox a literary journey as one is likely to find.<sup>5)</sup>

とはいえ、ミルトンの旅路が De Luca の言うよりは、波乱に満ちたものであることを拙論では第9稿から前稿までずっと追ってきたわけである。<sup>6)</sup> ここでかいつまんでまとめてみれば、『ミルトン』第15[17]葉の、夢とうつつの比喻に始まったミルトンの劇的な意識界の変換は、その意識の変容の各段階を司る「七天使」(the Spirits of the Seven Angels of the Presence) に支えられ、配偶者たる「流出」オロロンを置いてきた一人旅のミルトンに対して永遠界の者達は自らの「流出」達を提供する。この世の「幻霊達」や「地獄の騷り達」がミルトンをサタンとも稲妻とも彗星とも見紛う中を、火矢のように進むミルトンは、永遠界の次元世界である一つの「渦」から現世の次元世界である「渦」へと移行する。現世はその宇宙の全容を、擬人化されたアルビオンの姿を取って、ミルトンの前に開示し、そのアルビオンは、理性ないし利己的分析知を凝縮したユリゼンの相を呈している。理性の表徴である星の形を取ったミルトンは語り手(=ブレイク)の左足の足根骨に入り、黒雲がそこから湧き出す。地上に降りてみると、地上から天と見えるのは真の天の手前の中間領域「三重の天」(=ビューラ)であると気づく。第15[17]葉から図版のみのプレート(第16[18]葉)を挟んで第17[19]葉にかけてビューラが外在的な天としてだけでなく、自己の内界でもあり、肉化した他者としての女性、妻や娘でもあることにもミルトンは気づいてゆく。図版のみのプレート(第16[18]葉)では、先のユリゼンの形を取ったアルビオンとの遭遇を、ユリゼンの誤謬と対決するミルトンという絵柄で描き、その上方にはビューラを領する妻や娘達が、一個人を超えて普遍的な女性性レイハブらとなって描かれている。続いて彼女らは古代ユダヤ教世界の地名に結びつけられ、それは地上世界の描写ともなっている。その地上は「この世の外皮の殻」としてある意味でプラトンの世界観とも関わりつつミルトンの前に現前するのであった。

さて、こうして振り返ってみれば、ロスとエニサーモンの、サタンを克服しに到来したミルトンをこそサタンであると見間違う誤謬は、ミルトンの道すがら遭遇した「幻霊達」(Spectres)の誤謬でもあった—ミルトンの「影」は「幻霊達」の間を通して自らの進路に従って道行きを続けた、サタンと呼ばれながら…“Onwards his Shadow kept its course among the Spectres; call'd / Satan (15[17]:17-18)。利己的自我に凝り固まった「幻霊達」こそがミルトンをその権化と見紛うように、いわば「ユリゼン化」して利己的理性に席捲されている現世アルビオンと共にあるロスとエニサーモンも、同じ見方に引きずりこまれてゆく。第3葉29行に書かれ、後『ジェルーサレム』で頻出する表現、「その者は見たものになった」(“he became what he beheld”)は、「幻霊達」にも当てはまると第10稿で指摘しておいたが、無論、この場のロスとエニサーモンにもふさわしい形容である。

サタンへのブレイクの思い入れは『ミルトン』製作時(c.1804-c.1808)に殊の外、強かったらしく、絵画作品においてもこの時期(c.1805-c.1808)に優品が輩出している。「本来の栄光のうちにあるサタン」(Satan in his Original Glory: Thou wast Perfect till Iniquity was Found in Thee, c. 1805, 図1)、反逆天使たちを呼び覚ますサタン」(Satan Arousing the Rebel Angels, 1808, 図2)、「睦みあうアダムとイブを見つめるサタン」(Satan Watching the Endearments of Adam and Eve, 1808, 図3)などである。<sup>7)</sup>

先に見た D. H. George の、女性のサタンの共謀者としての側面への言及は、ひいては女性的流出が、ブレイクが構築した有機体的な人間性組成において、比較的対等な分有者としての地位から、単に降伏黙従すべき一側面一要素へと転落していく過程に論点が進んでいく。<sup>8)</sup> 確かにルーサ、エニサーモン両者の場合も、一人の人格であるようでもあり、人格のごく一面のようでもあり、男性性を司る神話人物よりもアンビギュアスな不安定な筆致で書かれていると言えるかも知れない。

D. Hume. George はさらに、同じ箇所、ロスのエニサーモンの御しがたさへの不満が、『ジェルーサレム』88葉において“refusest my Fibres of dominion”(88:13)「私の繊維束からなる支配を拒む」と表現されていることを挙げている。<sup>9)</sup> ミルトンの姿を見て歓喜するエニサーモンに立ち向かうロスのここでの対抗手段もまた「繊維」である。

サタンの超克

Los heard in terror Enitharmons words: in *fibrous* strength  
His limbs shot forth like roots of trees against the forward path  
Of Miltons journey, Urizen beheld the Imortal Man,

[M17[19]34-36, Italics are mine]

ロス恐怖のうちにエニサーモンの言葉を聞いた。筋肉繊維の力を漲らせて  
ロスの四肢は木々の根のように伸び広がった ミルトンがすすみゆく  
その旅路をさえぎって。ユリゼンはこの「不死なる者」を見た。

[傍点筆者]

「繊維」はブレイクにあって、本箇所においても筋肉繊維の隠喩と木々の根の直喩が重ねて用いられているように、動物由来、植物由来双方を兼ね、さらに無機物にもひろがってゆく重要なイメージ群である。遠藤徹氏は、世界の連続性に関するブレイクの想像力を決定的に賦活したのはポリプのイメージであるとして、その構成要素として、ポール・マイナーの「雲との結び付き、筋肉繊維、神経繊維、子宮、木の根、生殖器との連関などとのポリプのアナロジーの指摘」<sup>10)</sup>を引きながら、ロスとエニサーモンの関係に大きな影を落とす繊維の役割にも着目している。<sup>11)</sup>

ポリプといえ、『ミルトン』において特に活躍する概念であることを、ミルトンが下界に下降してこの世の身体と関わりをもつありさまを「たとえばポリプのような生命体が深みに繁茂してゆくように／七人には、ミルトンの影が「死の寝椅子」の下にはびこるのが見えた。」(Like as a Polyps that vegetates beneath the deep! / They (the Seven) saw his Shadow vegetated underneath the Couch 15[17]:8-9)と描写されているのを見た際に、確認しておいたのだった(第9稿)。

同じ世界の連続性とはいいながら、ポリプないし繊維は、あるべき世界の全体性とは対蹠的な現世的過誤をあらわすのであり、遠藤氏が引いているように、ロスからエニサーモンが分離生成する様子は、繊維の隠喩で語られる。

8. The globe of life bldd trembled

Branching out into roots;

Fib'rous, writhing upon the winds;

Fibres of blood, milk and tears;

In pangs, eternity on eternity.

[*The Book of Urizen*, 18:1-5, E78]

ロスがミルトンにも現世の生成力である「繊維」を行使し、絡め取ろうとする企図が、本葉(15「17」)の下部に図像化して描かれている(図4)。<sup>12)</sup> ロスは、判断力を無くした頭脳を持たないポリプのように頭部を欠き、身体のみで上半身は上肢を中心に、ポリプの分岐する触手のように、枝分かれする木の根のように、そうして手ごわい筋肉繊維のように、ミルトンの進路に伸びて襲いかかっている。ロスの頭部の役割をするのは地面に首のみ置かれているユリゼンである。ユリゼンの理性は利己的分析知に墮し、ロスの目を曇らせ、自らの自己中心的誤謬をミルトンに投影させている。まさに直上の6行の詩文の図解ともなっており、図版と詩本文とは拮抗関係にあることの多いブレイク作品にあって、ここまで、詩文と図像がパラレルであるのは特筆に価するといえるかもしれない。(つづく)

註

原詩の引用、プレートの番号、行数は、全て次の版に依る。David V. Erdman ed., *The Complete Poetry & Prose of William Blake* (New York: Anchor Press / Doubleday, 1982). 本書の頁を示す場合はE261のように表記する。

1) David V. Erdman ed., *A Concordance to the Writings of William Blake* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1967), 2 Vols. Volume 1, s. v. “vehicle”(4回), “Vehicles”(2回), “vehicular”(3回).

サタンの超克

- 2) 草稿 page 28 では、本箇所を含む 14 行が、後から挿入されている。挿入部はギリシア悲劇におけるコロスのように、人の子ら(the Children of Man)の語りとなっており、ナラティブに重層感のある厚みを齎すのに貢献している。Cettina Tramontano Magno and David V. Erdman, ed., *The Four Zoas by William Blake: A Photographic Facsimile of the Manuscript with Commentary on the Illuminations* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1987), p. 142.
- 3) 拙論、「サタンの超克—ブレイクの『ミルトン』について— (5)」、『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第 4 3 輯、1993、平成 6 年 3 月(pp.9~16)。
- 4) Diana Hume George, *The Feminine in Blake*, in Harold Bloom ed., *Modern Critical Views: William Blake* (New York: Chelsea House Publishers, 1985), p.184, “Blake reminds the reader periodically that woman’s alliance is, after all, with Satan, “the God of this world,” and with “the Patriarchal pomp and cruelty,” ...
- 5) Vincent Arthur De Luca, *Words of Eternity: Blake and the Poetics of the Sublime* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1991, p. 58.
- 6) 拙論、サタンの超克—ブレイクの『ミルトン』について— (9) ミルトン降下の部、『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第 4 7 輯、1997、平成 9 年 3 月(pp.29~34)。同 (10)、pp. 53~58。同 (11)、pp. 41~46。同 (12)、pp. 21~27。同 (13)、pp. 33~40。
- 7) 図 1、Martin Butlin, ed., *William Blake:1757-1827*(London: The Tate Gallery, 1990, Tate Gallery Collections Volume Five), p.125, 42.9×33.9cm。 図 2、「ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 英国ロマン主義絵画展」(*The Romantic Tradition in British Painting 1800-1950: Masterpieces from the Victoria and Albert Museum*, 千葉展、千葉県立美術館、2002 年 8 月 24 日から 10 月 6 日、名古屋展、松坂屋美術館、2002 年 10 月 19 日から 11 月 11 日、他郡山展、神戸展)カタログ、ヴィクトリア&アルバート美術館絵画部主任学芸員 マーク・エヴァンズ執筆、門田牧子他訳、株式会社ブレーントラスト編集、ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 英国ロマン主義絵画展」カタログ委員会発行、印象社製作、2002、p.43、51.8×31.2cm。 図 3、Martin Butlin, ed., *The Paintings and Drawings of William Blake* (New Haven: Yale University Press, 2 Vols. 1981), *Plates*, No.648(Cat. 536 4) 50.7 ×38.2cm, Museum of Fine Arts of Boston 所蔵、 *Text*, p.385。
- 8) p. cit. Diana Hume George, *The Feminine in Blake*, p.184. “The contention of Los and Enitharmon becomes a battle of wills, for “Two wills they had and two Intellects.” The emanation that before seemed to be a nearly equal partner in the united humanity is now just as often presented as the aspect that must merely capitulate; the emanation “refusest my Fibers pf dominion”(88:13).’
- 9) Ibid.
- 10) P. Miner, “The Polyp as a Symbol in Blake,” *Literature and Language, 1960-61* (Austin: University of Texas Press).
- 11) 遠藤 徹、「ブレイクにおけるポリプのイメージ」、『イギリス・ロマン派研究』(*Essays in English Romanticism*, イギリス・ロマン派文学会、第 18 号、1994、pp.29~38。なお、拙論第 9 稿の註 11 でポリプのイメージについて、Foster Damon, *A Blake Dictionary* と、同じ遠藤徹氏の「ブレイクにおける流体イメージ—十八世紀科学思想とブレイク」、『イギリス・ロマン派研究』第十九・二十合併号 (イギリス・ロマン派文学会、1996) に触れている。
- 12) 図 4、Robert N. Essick and Joseph Viscomi ed., *William Blak, Milton a Poem and the Final Illuminated Works: The Ghost of Abel, On Homers Poetry [and] On Virgil, Laocoön* (London: The William Blake Trust / The Tate Gallery, 1993), *Blake’s Illuminated Books Volume 5*, general editor, David Bindman, ただし、この版では、本葉 (plate 17[19]) は使用ヴァージョンが copy C (New York Public Library 所蔵)であるため、plate 16 の扱いである。

(提出期日 2003 年 3 月 5 日)

※ 著作法の関係で、紀要本体には掲載している図版類を、ネット上では削除してありますので、ご了承下さい。